『汽車の罐焚き』論ノート

岸　健治

1

日本のプロレタリヤ作家は「社会の生産場面を執拗に回避し」、「殆ど人間の労働を描いていない」と指摘する蔵原惟人の「藝術的方法についての感想」（一九三一年）を引いて、戦後、中野重治が書いている。

「多くの作品が書かれているが、人間の、日本の人民の労働を描いた文学はまだまだ少ないのである。」（「サルトルその他――主題の問題――」）

『汽車の罐焚き』は、労働の喜びと苦しみを描いた、その数少ない作品の一つである。それは擬音語・比喩・擬人法の目立つ、躍動的な文体で労働を描いていた。が、同時に、作中に転向作家の「私」が登場し、聞き書きをとるという特殊な構成をとって書かれてもいた。七節の『汽車の罐焚き』の半分近くが、作者自身と読める「私」に視点を据えた叙述になっているのである。

「ある日見知らぬ人が私をたずねてきた。それが鈴木君だつた。」

突然訪問した元罐焚きの鈴木君に勧められて、「私」は罐焚きを書こうと思い始める。そして、連帯感の回復を実感する。

「私は汽車の罐焚きが現われようとはかつて考えたことがなかつた。いまそれが現われた。井上君との関係で。松井との関係においてさえ。

私は、人々が私を取りまいていてくれるのを感じた。ある人は下獄するのに私を思い出してくれた。私を取りまいて……私を中心にではない。しかし私も人びとにまじつてそれらの人を取りまきたい。相手が女であつても、私はぴたりと肌をあてるだろう……」

二節になると「私」は鈴木君の家へ出かけ、模型投炭競投の話を聞くことになる。

ところが、三節は一転して「鈴木君の話は大体こうだった。」と

書き出される客観描写の世界となる。鈴木君の家で聞いた、「私」の遠縁の松井が模型投炭競技の練習中に喀血した過去の話が、鈴木君の言葉としてでなく、独立した物語として展開されるのである。

四、五節は再び「私」の視点に戻る。鈴木君と鉄道博物館へ行き、鈴木君から罐焚きの世界のあれこれを聞いたことが描かれる。

六節は再び、「鈴木君のしてくれた模型競技の話はだいたい次ぎのようだった。」と書き出される客観描写の世界である。福井・金沢間の往復乗務の後、模型投競技会でショベルを火室に落とした鈴木君の過去が、三節と同じ手法で描写される。ここが、『汽車の罐焚き』の中心部分である。

最後に、「私」に視点に据えた短い叙述があって『汽車の罐焚き』は終わる。

『汽車の罐焚き』の聞き書き形式は、発表直後から論議の的となっていた。

森山啓「文芸時評」（「新潮」一九三七年七月号）は、先に引用した「私」の主観的表白を引いて、「作者その人の感想であり、これを感傷や思ひ付きと見ることは禍である」と、好意的な見方をした。一方、「この作品は中野重治といふ文壇生活者の支へ捧がなくつて一人歩きできるものになつてゐない」とする批判的な意見もあった。（「新潮」一九三七年十月号の桂三平名義「匿名批評」）

以後の論文も、多くこの「聞き書き形式」を問題にする。中西浩「『汽車の罐焚き』おぼえ書き」は、先に引用した「私」の表白を「小説以前的言葉」として、批判的な見方をとった。『汽車の罐焚き』は「客観的な一つの叙事詩」として描かれるべき作品だったとする中西は、「私」の登場を「ロマンの虚構性から、より事実性へすがろうとする私小説的よわさ」[1]と、したのである。

対照的に、その言葉に「根本モティーフ」を読み取った平野謙の「解説」[2]は、聞き書き形式に肯定的な理解を示し、モティーフから選び取られた意識的な方法だったとした。木村幸雄「『汽車の罐焚き』における主体と記録」[3]・杉野要吉「『汽車の罐焚き』論」[4]なども、異なる角度から出発して、それぞれに、肯定的な評価に至っている。

だが、肯定・否定の評価を下す前に、なぜ「私」が登場しなければならなかったのかを確かめておかねばならない。『汽車の罐焚き』は、作中に書き込まれた様な経過を辿って書かれた作品ではなかったからである。さらに言えば、それは順調な発展のコースの上にでき上がった作品でもなかった。

以下、『汽車の罐焚き』がどの様な経過を辿って成立したのかをみてみたい。

2

「私は外へ出て行きたい。自分のけちな部屋で机にかじりついていることをやめて、外のひろい世界へ、多数者の動く生活のなかへ出て行きたい。」「勤労者の多くの産業における生活、それが時勢とともに受ける変化、その変化のなかに育つさまざまの人間タイプ、こういうものを描くために私は――主観的な言葉を使えば――勉強したい。」

『汽車の罐焚き』を予想させる様なこれらの言葉が「初夏雑感」（'35年6月執筆。以下の年月も同じく執筆時を示す。）に書かれたのは、『罐焚き』執筆の二年前であった。

一九三四年五月の転向からそれまでに、中野は『第一章』（'34年11月）、『鈴木・都山・八十島』（'35年3月）、『村の家』（'35年4月）を発表していた。いずれも、「自分の直接経験した事実（現象としても事実であったもの）」に即しながら、みじめに敗北していった「革命的文化運動の短い歴史」を描こうとした作品であった。（「『現在可能な創作方法』ということ」）

それら三作を書き終えたところで、連作を続けていく作業とは別の、もう一つの新しいプログラムを中野は夢み始めていた。「『現在可能な創作方法』ということ」（'35年8月）に、中野は書いている。

「私一個のことをいえば、私には題材ということが大きな問題になっている。」「私は私の知っている革命的文化運動の短い歴史を書いて行くつもりではいるが、同時に都市と農村との大衆の生活を書いて行きたい。」

同趣旨の、次のような私信もこの時期（'35年8月）に出されている。

「文学上のいろんな冒険もやってみるつもりだ。」「わが芸術的生涯にも一つの転換が来ねばならぬらしい。」

人絹の織り場を見たり、機工場の話を聞いたりして、題材を広げようとしたことも公刊された書簡から窺うことができる。

しかし、その題材探しも結局は「俺は、タネ拾いの方は、から駄目だね。」という嘆きに終わった。この間、中野が書けたのは身辺雑記風の小品『同窓会』一篇だけである。

皮肉なことに、「タネ拾いの方は、から駄目だね。」と書きつけた一九三五年九月二十二日付けの郷理からの書簡に、元罐焚き、加藤秀雄の突然の訪問が記されている。後にこれが『汽車の罐焚き』に書きこまれることになるのである。

元罐焚きの突然の訪問は、新しいプログラムを夢みながら、題材を見出せないでいた中野にとって、刺激的なものだったはずである。ところが、『汽車の罐焚き』に取りかかった形跡は窺えない。新し

いプログラムに踏み出せなかった中野は、以前からの連作に戻って『一つの小さい記録』（'35年12月）『小説の書けぬ小説家』（'35年12月）を執筆して年を越した。

これまでの連作が一応完結した今、新しいプログラムに踏み出して行くことがどうしても必要だった。一九三六年三、四月頃、中野は「自分のこれからの全体的な創作コースについて考えている」とか、「いままでのようなヘンな話でなく、小説らしい、面白い物語が書けるだろう」などと書簡に記しながら、新しい題材として、ミノムシ騒動（百姓一揆）をしきりと追いかけた。しかし、それも結局ものにならなかった。一九三六年中、中野は小説らしい小説がほとんど書けなかった。

その間の一九三六年三月に、やはり郷里にあった中野から次のような書簡が出されている。

「本棚にある原稿のうち、おそらく一番部厚な奴で、題は汽車もしくは鉄道従業員に関係あるやつで、加藤秀雄という人の小説があるから、それを書留開封で送って下さい。」

以前に加藤から預かっていた原稿を、返却するためのものであったらしく、その後も『汽車の罐焚き』の取り組みが始まった気配はない。前述したミノムシ騒動の材料探しを始めたのは、その直後なのである。八月には「福井の加藤君ほか一人酒を一舛下げて来」る、の書簡も残されているが、『汽車の罐焚き』（「中央公論」一九三七年六月号に発表）の執筆は、恐らく、一九三七年に入ってからと考えられる。最初の加藤の訪問から、その間、一年半の月日が流れているのである。

『汽車の罐焚き』は、運命的な出会いから、一瀉千里にでき上がった作品ではなかった。それは、むしろ、いくつかの試みが袋小路に入り込んで捨てられた後に、取り上げられた古いカードであった。このことは、『汽車の罐焚き』執筆が容易でなかったこと、及び、執筆にあたっては、その構成が時間をかけて考えられたものであったことを推測させる。

それ自体も難産であった『小説の書けぬ小説家』に、次のような一節がある。

主人公の転向作家は、書くものに困って田川一族の話を書こうとする。が、すぐにつまってしまう。小説から細かい事実を拾われ、田川一族の人たちに迷惑が及ぶのを恐れてのことである。主人公は無論、中野自身、田川のモデルは、西田信春である。

諦めた高吉は新しいタネを探しに、工場へ話を聞きに行く。だが、それも「何度目にか『おれにや工場のことなんか書けぬ！』と思いこん」で拾ててしまう。工場での体験を持たない主人公にとって、それは手のつけようもない世界だったのである。

『小説の書けぬ小説家』の主人公の苦しみは、この時期の中野の苦しみであり、困難そのものであったと思われる。

『汽車の罐焚き』が書かれるためには、少なくとも三つの困難が克服されねばならなかった。一つは、モデルに迷惑がかからないような配慮が必要だった。そして、全く知らない世界を書く方法を見出ださなければならなかった。さらに、どんな資格で、どんな立場に立って書くのかが明らかになる方法が必要であった。

これまで、中野は「自分の直接経験した事実」を描いてきた。そこから、労働者を描く新しいプログラムに移ろうとする時、現在の自分の位置を明らかにしておくことは不可欠な作業であった。

彼は「人の先に立ってああのこうのいう」た（『村の家』）挙げ句に「革命の党を裏切り、それに対する人民の信頼を裏切った」（「『文学者に就て』について」）転向者だった。

新しいプログラムを語った「『現在可能な創作方法』ということ」に中野は書いていた。

「勤労する多数者の日常生活を知ること、それにたいして自分を棚に上げておかぬ責任ある態度で対すること、そこから描写を引きだすことが現在痛切な欲望である。」

「自分を棚に上げておかぬ」ための、資格審査がどうしても必要だったのである。

それら全ての困難を同時に乗り越える方法が、聞き書き形式と、事実の一部改変であった。その方法を見出した時、ようやく、『汽車の罐焚き』は成立したと思われる。

3

鈴木君が母親の病気見舞いに福井へ行くのを幸い、そこで井上君の下獄の送別会をすることになった。その「井上君から手紙が来て、ついでにあなたによろしくいってくれといってきたもんですから……」

初対面の鈴木君は、「私」にいきなりの訪問理由をそう説明する。井上君は、「私」が転向・出獄した三年前に、「多数派」に連絡をつけに家へ来たことがある。「問題はめいめいの仕事場で何を具体的にするかだ。それならば、井上君がよく知っていることだ。多数派の新聞だってそれ以上知っていない」と考える「私」はやみくもに中央部へ結びつこうとする井上君の頼みを断わった。

「多数派」とは、非合法下の日本共産党が壊滅状態に陥った一九三四・五年頃に活動していた分派である。中野の転向は一九三四年だから、この辺りはまるで事実通りであるかのように書かれている。

その後の雑談中に、鈴木君が罐焚きだったとわかり、「私」はその体験を書けと勧める。自分で書くのは、「からしき駄目」だと言

う鈴木君は、逆に「私」に勧め始める。『汽車の罐焚き』にはそうある。

だが、この辺りの叙述が事実通りでなかったことは、書簡に明らかである。

まず、時と場所とが移されている。元罐焚き、加藤の突然の訪問は、一九三七年でなく、『汽車の罐焚き』執筆の一年以上も前の一九三五年九月のことだった。場所もまた、「私」の住む東京とは違い、福井県坂井郡高椋村に帰省中の中野を加藤は訪問したのだった。加藤は福井在住の青年だったのである。

また、書簡には、訪れた加藤が「全協や党は健在なのだろうか？　大分弱くなってるのだろうか？　全国的連絡はうまく行ってるのだろうか？」と、尋ねたことが記されている。その時の中野の答えは、「自分で、ひとに頼らずに仕事を築き上げて行かねば、たとえ中央がどうであってもはかどるものじゃない。」というものであった。

このやりとりが、『汽車の罐焚き』の井上君との会話の原型だったことは明白である。鈴木君のモデルが元罐焚きの加藤であったように、井上君のモデルもまた、加藤であった。先に引用した「私」の表白中の核とも言うべき、「ある人は下獄するのに私を思い出してくれた。」という一文は、事実としては全くなかったことだったのである。

時・場所の移し替えや、鈴木君とは別に井上君を設定したことは無論、加藤や、その周辺にあった人々への配慮が働いたものであろう。このモデルへの気配りは、労働運動に筆が及ぶ時の著しい省略ともなって現れている。

だが、それらの事実離れは、単にモデルへの配慮というだけでなかった。事実離れが別に、まだあるからである。

まず井上君についての微妙な事実離れがある。実際に加藤が尋ねたのは党・全協と言う正統だった。それが『汽車の罐焚き』では「多数派」という分派に置き換えられ、さらに、書簡にはない「刷新派」の例まで中野は出すのである。「情勢がどう変わっているにしろ、別組織をつくるのは組織論上のまちがいだ。」と「私」に言わせるためである。「多数派」は党中央に対する分派であった。同様に、「刷新派」もまた、極左冒険主義に陥った指導部に対抗するための全協の分派だった。正統派支持の「私」を登場させることによって、中野は、自分がどことつながろうとしているのかを、ここにはっきりと表明したのである。そして、正統派支持をこの時期に明確に表明することは、そのこと自体、新しい戦いの始まりを意味していたはずである。

更に大きな事実離れが、冒頭場面にある。実在の加藤は「渡辺順三のグループに接して短歌を書[5]き、小説も書こうという青年だっ

た。加藤の小説原稿を中野は見ているのである。自分で書くのは「からしき駄目」だから、「私」に書けと勧めるようなことがその時に事実あったとは、到底思えないのである。

これらの事実離れなしに、前述した「私」の表白が導き出されることはない。多くの論者が「私」の思いを、作者自身の主観的表白と読んだ。だが、そこに至る経過の叙述は、事実離れによって再構成された、創られた世界だった。だとしたら、そこから導かれた、あのパセティックな主観的表白もまた、創られた感動、創られた連帯感だったのではないかと思われる。

事実、加藤の訪問を知らせる当時の書簡の調子は実に淡々としていて、『汽車の罐焚き』の高ぶりは全く感じとれないのである。

「昨夜福井の人が一人たずねて来た。もと汽車の火夫。ずっと前に『戦旗』の支局をやっていていま名古屋で服役している人があるが、その人の細君でハタオリ工場にいる人で詩を書いている人があるので、出来たら、このもと火夫の人といっしょに逢いたいと思っている。」

しかも、その直後に中野は、「俺は、タネ拾いの方は、から駄目だね。しかしおのずから種子拾いになってはいるが。」と書いているのである。加藤の訪問は、連帯感を実感させ、一気に罐焚きを書く方向へ駆り立てるような決定的なものではなかったのである。

杉野要吉の前掲書は、「労働者とのあいだの連帯感の回復ということを、まずここでどうしてもわがものとして確認しておかねばならなかった」[6]としている。だが、それは、創られた連帯感の追体験を意味していたようである。中野はむしろ、すがるようにしてこう書いたのではなかったか。転向によって一度潰えた自我の再生は、ただ一筋の道を通してのみ図ることができた。それは、かつて立っていた地点へもう一度立ち戻ろうとすること、無理にもそこへと自己を引き上げようとすることであった。そして、生き方と文学を一直線に繋いできた中野の様な作家にとって、その文字の救抜もまた、全く同じであったと思われる。

『汽車の罐焚き』を執筆した頃、中野はしきりに「肉感性」という言葉を使った。それは「対象の実在性と、そこに出ている作者自身の思想とにかかっている」ものであった。（「創り手と受け手との関係」）

ここで言う「思想」が、一般的なものでなく、転向以前のそれと連続する特定なものを指していたことは明らかである。

また、かつて「リアリズム雑感」（'35年3月）に中野は書いていた。

「作品に肉づけられる文学的リアリティーというものは、そこに表現される題材の社会的リアリティーによると同時に、この社会的

リアリティーにたいする作者の働きかけのリアリティーにもよる。」

中野にとって、自己の再生を図る道と、文学的リアリティーを「肉づける」方法とは一つのことだったのである。

『汽車の罐焚き』は、自己の生き方と文学とを新たな戦いの戦列に立たせようとして書かれた。「私」の表白の切迫した息遣いは、その表現であったと思われる。

4

「私」の設定には、しかし、それ以外の理由もあった。

罐焚きの世界が全く知らない世界であったことは、中野自身が繰り返し書いている。例えば、『汽車の罐焚き』単行本前書きに言う。

「これは、私が一人で書いたものとはいえぬようなものでもある。」

実際、『汽車の罐焚き』は加藤の存在なしには成立し得なかった作品だった。

戦後の選集「はしがき」には、こうも書いている。

「『汽車の罐焚き』はわたしとしては試みであった。これは相当出来あがった材料を提供してくれた友人があって書けた。」

「相当出来あがった材料」と言うのだから、あるいは加藤の小説原稿も、その中に含まれるのかもしれない。

平野謙は前掲「解説」に、国鉄労働者の実状を「再確認するところから出発しなおさなければならなかった」作者の、「一枚一枚めくってゆくときの一種新鮮なおどろき」が聞き形式を生んだとしている。確かに、鈴木君からの聞き書き部分にはそうした張りを感じさせる力がある。やや説明的な叙述までもが、読者を引き込む力を持つのは、見聞きしている「私」の気分の高揚にそれが裏打ちされているからであろう。

だが、前述した『汽車の罐焚き』の成立事情からみて、それは事実に即した「おどろき」の表現ではなく、長い期間に加藤を通して見聞きしたものが整理され、確かめられながら追体験されていった時の緊張と高揚だったと言った方がいいようである。

聞き書き形式は、全く知らない世界を、リアリティーを失わないようにして描くための方法でもあった。先の「リアリズム雑感」の「働きかけのリアリティー」を、ここでも想起する必要があろう。

それは、客観描写には到底盛り込めない膨大な情報を書き入れることも可能な方法であった。機関車の構造、乗務員の昇進制度、偽慢的な共済組合、官製現業委員会の実態等々、中野は実に様々な事柄を聞き書きとして書き込んでいる。

聞き書き形式は、また、作者の主張が直接に提示できる形式でもあった。

六節の客観描写には、「ひつこんだ眼はすつかり落ちこんで」「頬はこそげたようにこけて」やっと目的地にたどり着く罐焚きの過酷な労働が描かれている。だが、労働には、「水たまりがきらりと光」るのを見ながら「気持ちいい振動」に揺さぶられる快感など、特有の喜びもあった。

それらを混然と描く客観描写に先立って、中野は予め、鈴木君の言葉として、次の様に書きつけておくのである。

「煤煙、緊張――緊張しないと命が危ないですから。――振動、騒音、苦熱、睡眠不足」。その結果、鉄道は死亡年齢が一般よりもずっと早い。――

ここで概括された苦痛の全てが、客観描写で肉感的に描き出されることになるのである。

予備の鈴木君は寝入ったところで起こされ、明早朝の乗務を命じられる。出勤までにあと四時間しかない。「睡眠不足」をおかして鈴木君は乗務する。雪に悩まされながら、鈴木君は「全身汗ぐっしょりにな」って罐を焚く。「火の粉がはじけながら飛んでくる」「苦熱」の中で。トンネルに入れば、「ものすごく反響するドラフトの騒音」に悩まされる。「煙突の上の口へ顔を突っこんでいるような苦しい幾秒」かが続く「煤煙」との戦い。無我夢中で処理しなければならない空転時の「緊張」。そして、薬罐がころげ落ち、「胃や腸が腹のなかでいっしょくたになってしまうのではないかと思うほど」の「振動」――。

作者は、労働の苦しさ・つらさを確実に伝えるために、予め聞き書き形式でそれらを概括し、予告しておくのである。

伏せショベル・模型投炭競技について、先に鈴木君の言葉として説明しておいた作者は、疲労して帰った鈴木君をそのまま、模型投炭競技会に直行させる。

「ファイヤホールへ投げこんだ瞬間、ショベルをくるりと伏せる」と鈴木君が説明する伏せショベルは、実際にも「苦しい」ものであったらしく、『汽車の罐焚き』の六年後、一九四三年になっても、まだ次のような報告が国鉄内部でなされている程である。

「この方法は石炭の火床への撒布もよく、且つ粉炭の飛散も少なくなりまして成績は非常によいのでありますが、投炭の都度手首を捻らねばならぬので、機関助士には相当の苦痛でありまして思う様に実績は挙っておりません。[7]」

乗務の後、鈴木君らは石炭超過の理由書を書かされているが、それも、これも、鈴木君が言うように「効率はあげて焚く量は減らそう」という一連の動きであった。この時期、「大戦終了に伴う事態の平静化によって、（石炭の）購入単価は半減」していた。[8]にもかかわらず、それが執拗に追求されたのは、不況と戦争があったから

である。そして、中野はそのことを正確に見抜き、『汽車の罐焚き』に書き込んでいると思われる。山場の模型投炭競技会での、鈴木君の失敗は次のように描かれる。

「ショベルを落としたな！　失格だッ！」

「ショベルを落した場合は、実際の乗務でショベルを火のなかへ取られたのと同じ意味で失格と規定されていた。それは兵隊が銃を投げ出したのと同じだった。」

ショベルを火室内に落としたら、本当に失格だったのだろうか。『日本国有鉄道百年史』には、「投炭練習の基準は鉄道局によって多少の相違があった[9]」とあるが、東京のある機関士OBは、次のように回想している。

「足元に石炭をこぼすと十グラムで〇・一点の減点、時間が遅れると一秒ごとに〇・五点の減点、火室内にショベルを投げこんだら、これはもう機関助士見習としては致命的で一回で五十点も減点されてしまう。その他、火室内を特にのぞけば十点の減点だし、ショベルを落とせば十点減点される[10]」。

火室内にショベルを投げこむことは、致命的ではあったが、失格ではなかったのである。京都の競技会規則でも、ショベルを落とした時はすぐに拾い上げて競技を続行することとあって、失格とはなっていない。模型競技の得点表の採点項目は、「火床・時間・焚上げ・撒乱炭の量」の四つに、「動作」の五つである。その「動作」の中の一項目として「ショベルを火床内に投入の時」がある。「伏せショベルを使はない時」「ショベルの刃先を突当てた時」「ショベルを落とした時」「火室内を特に覗いた時」「服装姿勢が特に悪い時」「不適当な行動をした時」「其の他」が、「動作」の全項目である。

この断ち切るような幕切れの部分は、「兵隊が銃を投げだしたのと同じだった。」という一文を書き込むための事実離れだったのではないかと私は思う。ここに失敗する鈴木君を描くことによって、中野は戦争を正確に撃ち抜こうとしたのではなかっただろうか。

無論、「戦争」はここに初めて出て来るのではなかった。

聞き書き部分で機関車のプレートが、CやD、ED等に変更されたことについて、作者は鈴木君に「機関車の総数がわかるといけないんで、そういう軍事的な意味もあるんだなんていう人がいます」などと言わせている。一九二八年の車両称号規程の改正はそうしたものではなかったようだが、中野はここで、戦争の影を感じとらせようとしている。さらに「兵隊が乗って稽古している」鉄道連隊について鈴木君に語らせた挙げ句に、先の「兵隊が銃を投げだしたのと同じだった。」という一文は出て来るのである。

鈴木君の言葉を書き込み、鈴木君を描写することによって、『汽

車の罐焚き』は、知らなかった労働者の実状を描き、一方で戦争を正確に撃ち抜こうとしたのだと思われる。

十五年戦争は長く続けられていた。そして、『汽車の罐焚き』発表の直後には、日中戦争が勃発している。プロレタリア文学運動が壊滅し、明日にも日中戦争が始まろうとする時期に、『汽車の罐焚き』は、時代の刻印を刻み込みながら、時代を越え、時代を先取りする文学として書かれた。それは、一度戦いに破れた者が挑んだ孤独な戦いの文学であった。そして、それを可能にしたのは、聞き書き形式と事実離れの方法だったと思われる。

しかし、『汽車の罐焚き』の聞き書き形式は一度限りのものでもあった。既に『汽車の罐焚き』の中にも、無理が来ていたのである。三・六節の客観描写は、「鈴木君の話は大体こうだった。」「だいたい次ぎのようだった。」という枠にはまりきれない部分を含んでいる。とりわけ、六節になると矛盾は拡がり、鈴木君が乗務中でそこにはいないはずの模型投炭競技会の様子を描かねばならなくなるのである。

その年の暮れ、「自分のことと一般のこと」に、中野は書いた。

「『罐焚き』を書いたことは、今後の客観的な作品――この言葉は粗雑だが――を書きたいという決心のようなものをはっきりさせた。」

中野が最も多くの可能性をはらんでいたのは、恐らくこの時期であったと思われる。事実、後に『汽車の罐焚き』を単行本に収録する時、中野は当時を回想して書いている。

「そのときはそのときで、この物語をも含めた一つの大きな物語を考えていたのであった。汽車のつぎには私は船を書くつもりでいた。」

この「ドック」は、客観的な小説として書かれるはずであった。だが、『汽車の罐焚き』発表の半年後には、内務省警保局による執筆禁止の処置が下される。長い沈黙の時が、中野を訪れることになるのである。

注

中野重治の著作からの引用は、全て新版『中野重治全集』（筑摩書房）に拠った。雑誌稿『汽車の罐焚き』と全集本との間に本質的な異同は見られない。また、書簡からの引用は全て、『愛しき者へ　下』（中央公論社）に拠った。

① 旧版『中野重治全集』（筑摩書房）別巻所収、一二〇頁。
② 旧版『中野重治全集』第四巻解説。
③ 『中野重治論　作家と作品』（桜楓社）所収。
④ 『中野重治の研究』（笠間書房）所収。
⑤ 『中野重治全集』第二巻後記、五〇六頁。
⑥ 注④に同じ、四六三頁。

⑦ 今村一郎『我国蒸気機関車発達の歴史』（日本鉄道運転協会）、二二八頁。

⑧ 『日本陸運二十年史』（日本国有鉄道）、四七六頁。

⑨ 『日本国有鉄道百年史』（日本国有鉄道）、八巻、五六八頁。

⑩ 向坂唯雄『機関車に憑かれた四十年』（草思社）、六四頁。